

第78回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2011年11月1日(火) 15:00~17:00

2 場 所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・門林岳史 文学部准教授

発表テーマ「マーシャル・マクルーハンの現代性 生誕100周年を機に」

・田中俊輔 環境都市工学部助教

発表テーマ「ナノサイズのハチの巣構造を備えたカーボン材料

界面活性剤の自己組織化を用いたボトムアップ技術」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

山崎製パン(株)と関西大学(商学部荒木ゼミ)による

ランチパックの協同開発について [資料1](#)

商学部「ロボットCORES」

(ロボット技術に関連するビジネスプラン作成プロジェクト)について [資料2](#)

第31回「地方の時代」映像祭2011の開催について [資料3](#)

統一学園祭の開催について [資料4](#)

「関大ミューズ防災Day2011~広がれ!みんなの安全・安心!~」

の実施について [資料5](#)

高槻ミューズキャンパス「キャンパス開放デー」の開催について [資料6](#)

1・2年次生父母・保護者対象 就職説明懇談会の開催について [資料7](#)

関大生の活躍について [資料8](#)

4 大学側出席者

楠見晴重学長、本西泰三学長補佐

門林岳史文学部准教授、田中俊輔環境都市工学部助教、

荒木孝治商学部教授、

横山博行広報室長、中川雄弘広報課長、竹中敏治学長課長 他

5 参考資料

(1) 関西大学通信 第405号、第406号、第407号

(2) 統一学園祭 パンフレット

(3) フィジカルヘルス講演会 チラシ

(4) 特別研究・教育促進費等に係る国際シンポジウム チラシ

(5) 第1・2回 関西大学文化人連続講演会 チラシ

(6) 社会安全学部 客員教授講演会 チラシ

(7) 行事予定表(11月~12月)

以上

マーシャル・マクルーハンの現代性 生誕 100 周年を機に

文学部准教授 門林岳史

【概要】

マーシャル・マクルーハンは、1960年代に「クールなメディア」「メディアはメッセージである」「グローバル・ヴィレッジ」などといったキャッチーなキーワードで一世風靡したカナダのメディア思想家である。1960～70年代にかけて、日本でも竹村健一などの紹介によってジャーナリスティックな話題を呼んだ。その後、ブームが過ぎ去ってほとんど忘れ去られていた時期もあったが、1990年代後半以降、インターネットや様々な情報端末の普及にともない、マクルーハンの思想は再び注目を集めている。

2011年はマクルーハン生誕100周年にあたり、世界中で記念行事や国際的な学会などが開催されている。本報告では、そのうちで私が参加した「McLuhan Galaxy 2011」(バルセロナ、5月22-25日)と「Re-touching McLuhan」(ベルリン、5月27-29日)の模様を紹介しながら、マクルーハンの思想の現代性について検討したい。

【プロフィール】

1974年大阪府生まれ。関西大学文学部准教授。専門はメディア論、エピステモロジー研究、表象文化論。東京大学教養学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科修了。トロント大学「文化と技術のマクルーハン・プログラム」ジュニア・フェロー、東京大学「共生のための国際哲学交流センター」特任研究員などを経て2009年より現職。著書に『ホワッチャドゥーイン、マーシャル・マクルーハン？ 感性論的メディア論』(NTT出版、2009年)。学術批評誌特集企画に『表象』第二号、2008年(特集=ポストヒューマン)、『SITE ZERO/ZERO SITE』第三号、2010年(特集=ヴァナキュラー・イメージの人類学)、『KAWADE 道の手帖 マクルーハン 生誕100年 メディア(論)の可能性を問う』2011年。

ナノサイズのハチの巣構造を備えたカーボン材料 界面活性剤の自己組織化を用いたボトムアップ技術

環境都市工学部 助教 田中 俊輔

ナノサイズの均一な細孔と特異的な規則構造を有するポーラス材料は、新規ナノ材料として環境・エネルギー、光学・エレクトロニクス、医療・バイオなどへの応用が期待されている。その高機能化のために、用途ごとに最適な細孔径と細孔構造を制御する（不必要な細孔を生成しない）技術およびマクロな形態を制御する技術の開発が求められている。

ナノポーラスカーボン合成の従来法では、ナノポーラスシリカを鋳型として、その細孔内に炭素源を充填するように有機化合物を炭化することによって、元のシリカの細孔配列と周期性を転写した構造が得られる。しかし、シリカ細孔内での炭素化には、ショ糖などの炭素源を濃硫酸で脱水、炭化を繰り返し行う必要、並びにシリカの鋳型をフッ化水素酸で除去する必要がある、合成が多段階にわたりコストと時間がかかる。

本研究では、従来無機シリカ鋳型を必要としてきたナノポーラスカーボンの合成を有機有機相互作用を利用することによりワンポットで行う新規な合成法を開発した。本手法の基本コンセプトは、易分解性高分子を鋳型として、難分解性（熱硬化性）の有機構成成分との複合体形成と、有機有機複合体の自己組織化と、それに続く易分解性鋳型の除去による規則性ナノ細孔の生成にある。シリカ鋳型を準備する必要がなく、かつ有機分子集合体鋳型の除去と炭化を同時に行うため合成手順を簡略化することができる。従来法では困難であったナノ構造の設計と形態制御を直接行うことが可能である。そのため工業化に適した手法であると言える。界面活性剤の自己組織化を用いたナノポーラスカーボンの合成方法について概観するとともに、形態制御とその応用展開に関して得られた知見を紹介する。

【プロフィール】

1978年生まれ、富山県出身。2001年に同志社大学工学部物質化学工学科を卒業後、大阪大学大学院基礎工学研究科へ進学、02年9月に博士前期課程を半年短縮修了、05年3月に博士後期課程を半年短縮修了。博士（工学）。その後、大阪大学博士研究員（05年4月 - 同年9月）、米国インディアナ州パデュー大学博士研究員（05年10月 - 06年3月）、関西大学博士研究員（06年4月 - 07年3月）を経て、07年4月に関西大学助教に着任。

環境・資源・エネルギーの諸条件を考慮したナノ空間材料の設計と機能化に関する研究に取り組む。「規則性ナノ構造体の合成法の開発とその構造・形態制御に関する研究」に対し、09年度化学工学会研究奨励賞を受賞。所属学会は化学工学会、ゼオライト学会、日本膜学会、触媒学会、石油学会。